

# 茶の湯の陰陽論

——『南方録』の曲尺割を中心に——

笠井 哲

## 序

本稿の目的は、茶の湯における陰陽論を伝書に即して考察して、その意義を明らかにすることである。

陰陽論、さらに陰陽五行説は、古代中国で発生した世界観であり、万物を陰陽の二気によって生じたとする。この二気や五行（五原素。宇宙を支配する自然勢力を木火土金水とし、そのうち、木火は陽に、金水は陰に属し、土はその中間にあるとする）の盛衰消長によって、天地の変異・禍福、人事の吉凶を説明するのである。この陰陽五行説が、天文曆法とともに日本に伝来し、それによる陰陽道が最も盛んに行われたのは、平安時代の中頃である。

近世初期の芸道、武芸、いけばな等<sup>1</sup>においても陰陽論の影響が見られる。本稿は、茶の湯、特に利休の秘伝書とされる『南

方録<sup>2</sup>』について、その陰陽論を考察する。『南方録』の中でも、陰陽論を論じているのは「墨引」の巻である。これは、立花実山（一六五五—一七〇八）が堺で発見したとされる。他の巻は、本意ながらも利休が許したのであるが、この「墨引」の巻は、秘伝が明らかにされ過ぎているので、利休が廃棄を命じたという。それが、墨を引いて消してしまえという巻名の由来である。「墨引」のテーマは、陰陽論に基づく「曲尺割」である。曲尺割の重要性は、『南方録』の「滅後」に、次のように記されているところからもわかる。

休は、五つ十一のカネ、七ツガネ、二つを常に懐中して居玉ふ。いつも置合し玉ふ時は、この坊さへそこにはをかれず、勝手へ追やりて、只ひとりかのカネを取出て置合せられしなり。まことに殊勝、道ををろそかにせぬいましめなるべし。<sup>3</sup>

そこで、本稿では、この『南方録』の曲尺割を中心に、茶の

湯の陰陽論を考察してみよう。

## 一 自然

茶の湯は、茶室をとりまく自然を抜きにして考えることにはできない。折々の自然は、茶会が如何なるものになるかを左右する重要な契機と考えられるからである。茶の湯において、自然は陰陽五行によって構成されている。

『南方録』の「墨引」は、次のような書き出しで始まる。

書院、台子、草庵に至るまで、カネわりの数を定ること、根本何のカネに本づきて極めたることを、人皆しらざるがゆへに、事に依て迷惑するなり。凡天地順行のカネあり。

四季に土用を加へて節を五つにたて、四方に中央を加へて五つを立。一日を辰より申の五時にわかち、夜を五更にわかち。陰陽五氣にあらわれて、人も五の体をうくる等のもつぎにて、五ツガネを定規として、大も小もこのカネ違ふことなし。五は陽数なり。形にあらはる、ものは陽なり。この五ツガネの間々六を、陰のカネとす。本式には陽の五つを用て、六は常に用ひず。草庵の茶の湯は、台子本式書院の格式を本とするといへども、陰陽ともに用る子細あり。書院、台子にも陰陽ともに用る子細にもつぎてのことなり。その子細を会得せざれば、必相違することなり。ねんごろに根源をきはめぬれば、いかやうにも自由なることと云々。

これによると、書院、台子から草庵のわび茶に至るまで、曲尺割の数が定まっているけれども、その基本にどのような根拠となるかねがあつて決められているのかを人々は皆知らないの、場合によると困惑してしまうのである。

四季に土用を加えて五つの節を設ける。あるいは四方に中央の点を加えて五点を立てる。一日の昼間を辰の刻より申の刻までの五時に分け、夜を五更に分ける。また陰陽は木火土金水の五氣に表現され、人の体も五体から成る。というように、この五という数に基づいて五つのかねを基本とし、大かねも小かねもこの五つのかねと相違することはない。五は陽数である。形に現れるものは陽である。この五つのかねの間をとつた六つを陰のかねとする。本式には陽の五つのかねを用いて、六つのかねは普段は使わない。草庵の茶の湯は台子を本式とし、書院の格式を基本とするものであるけれども、陽の五つのかねばかりでなく陰の六つのかねもともに用いるいわれがある。書院や台子でも、陰陽のかねを両方とも使いうわれに基づいていることだ。その書院台子の法式を理解しておかなければ、必ず間違つてしまう。十分にその根本を明らかにしておけば、どのようでもかねは自由になるものだ、というのである。

以上は、後述の曲尺割の重要性とともに、「自然」に関する叙述である。

また、次のようにいわれている。

天地の間の二氣も、春夏の温暑の時もふと寒冷のことあり。秋冬の冷寒の時もふとあた、かなる日あり。さればとて、

春を秋とも云はず、夏を冬とも云ざるがごとし。一季の内の変なればなり。

すなわち、天地の二気のこと、春夏の温かい、また暑い季節でも、思いがけず寒いことがある。秋冬の冷寒のときも暖かい日がある。だからといって、春を秋ということではなく、夏を冬といわない。一つの季節の中での変化だからだ、というのである。

さらに、『南方録』の「覚書」に、

惣じて朝、昼、夜ともに、茶の水は暁汲たるを用るなり。

これ茶の湯者の心がけにて、暁より夜までの茶の水絶ぬやうに用意することなり。夜会とて、ひる已後の水これを用ひず。晚景半夜までは陰分にて、水気沈みて毒あり。暁の水は陽分の初にて清気うかぶ。井華水なり。茶に対して大切の水なれば、茶人の用心肝要なり。

とある。すべて朝会でも昼会、夜会でも、茶の湯には明け方に汲んだ水を用いる。これは茶の湯者の心がまえで、暁から夜の茶会までの水を切らさぬよう用意しておくことである。夜会だからといって、午後の水は使わない。夕方から夜半までは陰であるため、水の生気が沈んで毒がある。夜明けの水は陽の最初の水で水の清らかな生気が盛りあがっている。これが、井華水である。茶にとって大切な水だから、これを常に用意しておくのが、茶人の心がまえとして肝心だ、というのである。

ここで「井華水」とは、日の出とともに最初に汲んだ水である。これを尊ぶのは、中国と日本の共通の習俗であり、その影

響がここに見られるといえる。

## 二 茶事

次に、茶事における陰陽を検討しておこう。

まず、茶会の陰と陽について、「墨引」に次のように記されている。

数奇屋にて、初座後座の趣向のこと、休云、初は陰、後は陽、これ大法なり。初座に床はかけ物、釜も火あい衰へ、窓に簾をかけ、をのゝ一座陰の体なり。主客ともにその心あり。後座は花をいけ、釜もわきたち、簾はづしなど、みな陽の躰なり。かくの如き大法なれども、天氣の晴くもり、寒温暑湿にしたがいて変体をする事、茶人の料簡にあり。たとへば、鬱々しき天氣などの時、初座簾をはずし、つき上げをあげ、花をいけなどすることあり。されども、一向に陽とは心得べからず。火あいを以て第一とするゆへ、かくの如きの躰を陰中の陽と云べし。この時とても、後座を陰にすると云ことはなし。右、火あひにて勘弁すべし。

これによると、茶室における初座、後座の趣向について利休がいったのは、初座は陰、後座は陽、これが大切な法だ、ということだった。初座には、床に掛物、釜の火勢も衰え、窓には簾が掛かってほの暗く、それぞれ一座の道具だが陰の姿になつている。亭主も客もその心がまえである。後座には掛物を取つて花をいけ、釜も沸き、簾がはずされ室内も明るく、すべ

てが陽の姿である。以上が基本の法であるが、天氣の晴れ、曇り、気温や湿度によって変化させるのは、茶人の考えによる。たとえば、うつつとうしい天気などの時は初座でも簾をはずし、突上窓を上げ、花をいけたりすることがある。そうだからといって、すべてが陽であると考へてはいけない。陰か陽かを決める一番大切な点は火相であり、初座の火相は衰えているから、この場合は陰の中の陽というべきだ。この時でも後座を陰にすることはない。陰陽は、火相をもとに考へるべきだ、というのである。

さて、道具の数も陰陽に従うことが、「墨引」に、次のように記されている。

器の数、初座後座いかゞ仕るべきやと尋申けるに、台子書院は、昼はカネも数も陽を用、夜はカネも数も陰にて、あるいは祝儀、懐旧、仏事等、それぐ口伝あり。草菴は、小座敷の内物数も少きことなるゆへ、数は吟味に及ばざるかと、紹鷗とも相談申たることなれども、初座陰、後座陽と差別することなれば、数も調半を以て能々料簡すべし。

歌、  
へ床は床座席は座席棚は棚

二調一半二半一調

これにて得心あるべし。

或は初座、

床にへ墨跡

席にへ釜 または風炉にても

棚 へ香合 へ羽帚

右二半一調なり。惣じて床と棚の数は同前になきやうに心得てよし。見にくきものなり。二調一半も右にて心得べし。器の多少によらず、書院、台子、草菴にても、床、棚、座席、皆調半を嫌べし。そへをき、カネはづし等にて自由すべし。

すなわち、道具の数は初座、後座によってどのようにしましようか、と利休に尋ねたところ、こう答えられた。台子、書院は昼の茶会では曲尺割も道具の数も陽を用いて、夜は曲尺割も数も陰にする。あるいは祝い事の会、故人を懐旧する茶会、仏事などにはそれぞれ口伝がある。草菴の茶はもともと小座敷の内でのことだから、道具の数も少ないので数を決めなくてもよいのではないかと武野紹鷗（一五〇二—一五五）とも相談した。けれども、初座を陰、後座を陽と区別するのだから、数も偶数と奇数をよく考へておくべきである。この教えを歌にしてみよう。床は床の道具、座席は座席のうちの道具、棚は棚の上の道具、この三ヶ所の道具は、二ヶ所が偶数なら一ヶ所は奇数に、また二ヶ所が奇数なら他の一ヶ所は偶数とする。

この歌でよく理解できるだろう。たとえば、初座は、

床に 墨跡

座席に 釜、または風炉でも

棚に 香合 羽帚

これは、二ヶ所が奇数で一ヶ所が偶数つまり二半一調である。およそ床の道具の数と棚の数とは同じにならぬようにと覚えて

いてよい。見て美しくないからである。二調一半も右の例から推し量って理解しておきなさい。道具の多少によらず、書院、台子も草庵も、床、棚、座席が全部偶数、あるいは全部奇数というのを嫌うであろう。その場合には添え置き、かねはずしなどの方法で、数を自由に變化させるべきだ、というのである。

また、茶室について、『南方録』の「滅後」に、

もず野の草菴、窓の明やう、障子のくばりなど、面白くをばへしま、ある時図を写すを、休見玉ひて、わ僧のしわざとも覚へぬことかな、その窓その障子、みなこの所の方角、露地の境に應じてこそよけれ。こと所にかくのごとくしつらはれたらば、物笑なるべし。露地の仕やう、草茨のしつらゐも、左右前後、かの本式のカネさへ我心にあれば、事かくことなし。

とある。百舌野にあった利休の茶室の窓の明け方、障子の配置などが興趣に富んでいると思われたので、ある時茶室の図を写した。それを利休が御覧になり、お前のすることと思えない。この窓や障子の造りは、みなこの方角や、露地と外との境に應じているからよいのである。異なつた所にこのように造つたならば、物笑いになるだろう。露地の仕方、草葺き屋根も、左右、前後、例の方式の曲尺割さえ心得ていれば、どこに造ることになつても困ることはない、というのである。

このように、利休は南坊宗啓に、まねをすることよりも、「曲尺割」を身につけて、それを応用することが大事であると論じたのである。では、その「曲尺割」とは如何なるものであろう

か。

### 三 曲尺割

次に、曲尺割について検討してみよう。

五陽六陰のかねの秘事について、「墨引」に次のように記されている。

五ツガネのこと、間くく六を加へて十一のカネ伝授ありし時、いまだ陰陽の差別くはしく会得せざりければ、迷惑のこと多かりしなり。第一五十かざりの台子、草菴の置方に至るまで、五ツガネのみにて教へらるゝ。これに依り不審晴がたく、尋申けるに、休云、丁寧の問感喜す。五十かざりを知ても、この間のカネを分別せざれば不自由、またはあやまちすることなり。某も道陳に再三問しかども、秘事とのみ云て伝授せず。紹鷗に尋申たれば、道陳は教へずやと仰せらる。秘して教へずと申す。いやくさにあらず。我等あるとき道陳に尋しに、空海もこの事何とも申さずと答て分明ならず、我等また宗陳に問しかどもしらず。宗悟に問しに、悟は珠光の伝深切の人にてありしゆへ、たしかに覚へてつぶさに伝へられしなり。かほど大切にて知人まればなることゆへ、第一の伝授事なり。凡三ツわり五ツガネまでは教へずして事との、はぬゆへ、誰にも伝るなり。問の六ツガネのこと沙汰にも及ばず、問尋ぬる弟子もなし。宗易に於て秘事を残すべきにあらずとて、委く相伝ありし

なり。御坊は深切に工夫して、かくの如く問尋らるること、我等が鷗への心入りまされり。いかにも伝へ申べし。吉日を撰て改て相伝すべしとて、天正九年十月廿三日相伝をうけ申けるなり。その次第あらく左に記す。

これによると、五つかねのこと、及び五つかねの間ごとに置かれる六つのかねをこれに加えた十一のかねのこと(図を参照)を伝授された時には、まだ陰陽の区別を詳しく理解していなかったで、わからないことが多かった。第一に五十飾りの台子から草庵の置き方に至るまで、五つかねのみで教えられたので疑問が残つてしまい、利休にお尋ねした。

利休がいうには、丁寧な問をされて嬉しいことである。五十飾りがわかっても、この間のかね、すなわち陰のかねを理解しなければ自由にはできないし、また間違ふものである。自分も北向道陳(一五〇四一六二)に再三質問したけれども、秘事とのみいつて伝授してもらえなかった。紹鷗に尋ねてみると、道陳は教えなかったか、といわれるから、秘事として教えてくれませんでした、と答えた。紹鷗がいうには、いやいやそうではない、自分もある時道陳に尋ねたら、空海もこのことは何ともいわれなかったといって、はっきりしなかった。また自分は、十四屋宗陳にも質問したけれども知らなかった。十四屋宗悟に質問したら、宗悟は村田珠光(一四三三一一五〇二)の教えを深く学んだ人であったので、確かに覚えていて詳しく伝授してくれた。このように大切なもので、知っている人もまれであるから、秘事の中でも第一の伝授事である。およそ三つ割五つか

ねまでは、教えなくてはならないので誰にでも伝授される。だが間の六つのかねのことは問題にされることもなく、尋ねる弟子もない。宗易には秘事を残すべきでないから、すっかり伝えよう、といって紹鷗は詳しく伝授してくれた。

南坊、貴方が深く考えてこのように問われたことは、自分の紹鷗に対する心より熱心である。確かに貴方に伝授しよう、といて天正九年十月二三日に伝授を受けた。その内容を大体次に述べる、というのである。

次いで、その伝授の内容が「墨引」に、こう記されている。

十一ノカネ、五ツハ陽、コレヲ体ノカネト云、六ハ陰ニシテ、用ノカネナリ。

吉凶にして陽は吉、陰は凶とす。祝儀の時など勿論、書院、押板、台子、一式陽のかざりなり。仏事懐旧等、陰なり。それも嗣孫を賀する心にて、一品づ、陽にかざる。平常の台子いつも陽かざりをよしとす。夜会は陰かざり本式なれども、それさへ陽かざりにしてひだちはなし。昼の会に陰かざりの台子と云ことはなきことなり。かくの如くなるゆへ、草庵にても初後ともに、陽カネ陽数にしくはなきかとの僉議ありけるも、紹鷗の勘弁尤のことなり。しかれども、片よりたるやうにて不自由なるゆへ、陰陽相交へて、初後に分別し、また茶人の会得に依てはたらきさばき等面白き子細もあれば、陰カネ陰数も用てよきなり。<sup>(1)</sup>すなわち、十一のかねのうち、五つのかねは陽、これを体のかねといい、六つは陰、これを用のかねという。

吉凶でいえば陽は吉、陰は凶とする。祝い事などの時は勿論、書院、押板、台子は、すべて陽の飾りである。法事、懐旧などは陰である。その場合でも、子孫の繁栄を祝う心で一品ずつ陽に飾る。平常の台子は、いつもいつも陽の飾りを正しとする。夜会は、陰の飾りが本当であるが、台子の場合その時でも陽の飾りにして非難されることはない。昼の会に、陰の飾りの台子ということはない。このようなことから、草菴のわび茶においても初座、後座ともに、陽のかね、陽の数に及ぶものはないかという議論があったけれど、紹鷗の考えが正しい。しかし、それでも片寄った点があるようで不自由であるから、陰陽をまぜて、初座、後座にそれぞれよく考えて、また茶人の理解の深さに従って工夫すれば、その面白さも出る。だから、草庵でも、陰のかね、陰の数も使つてよい、というのである。

以上が、曲尺割の由来とその原理に関する説明である。曲尺割のルーツを珠光としているのは、この秘伝を権威づけるためになされたのかも知れない。いずれにせよ、曲尺割は、陰陽論によって、理論的な基礎が与えられたということがわかる。

#### 四 峯すりのかね

さらに、曲尺割の中でも「峯すりのかね」という注目すべき概念について検討しよう。「峯すり」とは、雅楽の言葉で、楽の舞の足が音楽の拍子をわずかにはずすことをいい、それを道具の置き方に応用したのである。

『南方録』の「墨引」に、次のように記されている。

一物のかざり名物等、我道具とて卑下に及ばず。カネの真中峯摺にをくべきなり。すりとは、カネの真中を道具の真中に少ずらすなり。中／＼目に見ゆるほどの事にてなけれど、これ秘事口伝なり。右をすり左をすること、子細あることなり。常の道具、すりガネと云ことはなし。皆三分一なり。休云、草菴にこま／＼のカネ吟味にも及ばざるやうなれども、一物などはこまやかに勘弁すべし。しかるゆへに、常の道具も、麓末に置候へば一物のやうに置なすなり。煨煉干要のことなり。

これによると、一つものの飾りの名物など、たとえ自分のものであっても遠慮するには及ばない。かねの真中の峯すりに置くべきだ。すりとは、かねの真中を道具の真中から少しずらすことである。とても目に見えるほどではないけれども、この少しずらすというのは秘事口伝である。右にずらしてするか、左にずらしてするか、これはいわれのあることだ。普段の道具には、すりかねということはない。すべて三分の一である。利休がいうには、草庵の茶では細かい曲尺割の研究などいらないようなものだけれど、一つのものなどは細心の注意を払って理解すべきである。そうであるから、よく理解していないと、常用の道具でもいいかげんに置いて、一つもののように置いてしまふのである。だから、練習が大切だ、というのである。さらに、峯すりのかねについて、次のような詳しい説明もある。

カネにあて、一ツ物を真中にをくこと、大法の通なり。されども真鉾にあたるを嫌ふなり。鉾はづしとて、少心もちにほこをはづすなり。大秘事なり。はづしやう口伝あり。

たとへば、音楽の拍子にも、拍子に合はよくして、拍子にあたるは下手の楽なりとかや。楽人の秘書に、それを峯すりの足と云となり。利休は台子その外にても、一物のカネを峯すりのカネとも、すりカネとも云る、なり。ゆるがせに心得べきにあらず。休の歌に、

へ中央のかねにあはせて置ものは

うたがひもなき秘事の一物

へ中央のかねにありとも右ひだり

三分が、りは常の物なり

凡五ツガネ六つの間のカネ、いづれも常の諸道具、カネにあつるを嫌なり。みな三分一なり。

すなわち、かねに合わせて名物の一つものをかねの真中に置くことは大法の通りである。けれども、本当の真中にあたるのはよくない。鉾はずしとて、少し心持ち中心をはずすのである。これは大秘事である。はずし方には口伝がある。たとえば、雅楽の拍子でも、拍子に合うのはよくて、拍子にあたるのは下手な雅楽だとかいうことだ。楽人の秘伝書に、それを「峯すりの足」という、とある。利休は台子やその他についても、一つものかねを「峯すりのかね」とも、「すりかね」ともいわれた。いいかげんに心得るべきではない。利休の道歌に、こ  
ういわれている。

中央のかねに合わせて置くものは誰の目から見ても  
異論の余地もない秘蔵の名物である。

中央のかねに置かれていても、右や左にずらせて

三分の一だけかねにかけてあるものは

名物ではない普通の道具である。

およそ五ツかねも、その間の六ツのかねも、いづれも普通の道具をかねの真中にあるのはよくない。名物でない普通の道具は、すべて三分の一かける、というのである。

以上の「峯すりのかね」に、シンメトリーを尊ぶ中国文化と異なる、日本文化の特性が見られるといえよう。

## 結び

これまで考察してきた陰陽論に基づく曲尺割について、利休自身によるまとめが、『南方録』の「滅後」に、こう記されている。

あるとき、休に参りたれば、反古のうらにか、れたる道歌

あり。ひそかに取て帰りける。その歌

へつゞくとは体にはさまる用のカネ

用にはさまる体はつゞかず

へく、りガネ道具にはさまるを知らずして

あやまちするは鴉鵲のまね

へ大は大小は小なる五ツガネ

円きも方もそなはりにけり



へカネは只小狐丸の夢想づち

ほこになあてそほこなほづしそ

へ五つ折六つの小わりを修行して

至るこゝろのツガネなり

へ忘たる心のカネは五つとも

六つともなしにあふぞ妙なる<sup>(14)</sup>

これによると、ある時南坊宗啓が利休のところへ行くとき、反古の裏に書かれた道歌があった。それをこっ所りと持ち帰った。その歌は次の通りである。

つづくかねとは、体にはさまれる用のかねの場合に使うのであって、その時は用つまり陰のかねの上であつても、体すなわち陽の道具の置き合わせとなる。用のかねにはさまれた体のかねの場合は、つづくかねとはならない。

くぐりがねというかねは、道具の種類、すなわち盆、水指のような特定の道具の場合に使えるのであり、そのことを知らないでくぐりがねを間違つて使うのは、鴉が鶉のまねをするようなものだ。

大きい座敷は大きいなりに、小間は小間なりに、座敷の広狭、形態によらず五陽六陰のかねは通用する。それゆえ、その根本を把握して応用すれば、座敷や道具の形態によらず、すべてに活用できる。

かねというのは、ちょうど小狐丸の夢想の槌の伝説のように、銚つまりかねの中心にあててはいけないし、かといつて銚をはずしてもいけない。

五つ折六つの小割り、すなわち五陽六陰の曲尺割を修行して、究極の至るところは心のかねである。

修行を積んで形式を超えてしまふところまで進むと、曲尺割を忘れても、心のかねが自然に五つかね、六つのかねに合致してしまふのが本当にすばらしい。

この最後の歌で、終には曲尺割を忘れて、特に意識しなくても、自然に正しくなうといわれているのは、注目すべきことである。ここに「守破離」<sup>(15)</sup>でいえば、「離」に到達しえた利休の姿を想起することができる。

戸田勝久氏は、次のように述べている。

曲尺割は利休自身によつて、その桎梏からの脱却が唱えられ消滅する。しかしそれはあくまでもこの書物に則した言い方であつて、じつは曲尺割の規矩を説く茶書は、『南方録』の他に皆無なのである。『南方録』と曲尺割はシャムの双生児だといえる。<sup>(16)</sup>

したがつて、最終的には忘れることを目指して学ばせる陰陽論に基づくこの「曲尺割」こそ、利休流茶道の一大特徴と考えられるのではないだろうか。<sup>(17)</sup>

## 註

(1) 拙論「いけばなの陰陽論」、『研究紀要第27号』（福島工業高等専門学校、平成三年）所収、六〇—六六頁参照。

(2) 『南方録』の成立については、戸田勝久『千利休秘伝書

南方録の展開』(平凡社、昭和六三年)に詳しい。

(3) 『南方録』からの引用は、西山松之助校注、(岩波文庫、昭和六一年)により、頁数を記す。二五七頁。

(4) 一六〇頁。

(5) 一六三頁。

(6) 一五頁。

(7) 一六二―一六三頁。

(8) 一六三―一六四頁。

(9) 二七六―二七七頁。

(10) 一六四―一六五頁。

(11) 一六五―一六七頁。

(12) 一六九―一七〇頁。

(13) 一八五―一八六頁。

(14) 二七四―二七五頁。

(15) 拙論「千利休の修行論」、『倫理学第9号』所収、四七―五六頁参照。

(16) 戸田勝久『南方録』(教育社、昭和五六年)、六五頁。

(17) 熊倉功夫氏は、『南方録を読む』(淡交社、昭和五八年)、一九三頁で、次のように述べている。(傍線引用者)

曲尺割という考え方がどこからきたものかまだ十分わかっていない。かねは曲尺であり、ものさしの意である。

まず基準になる長さを決め、その倍数で柱間の長さや、屋根のそりなどを決定する方法が木割法といって日本建築の世界にある。おそらくそうしたものを根柢とし、さ

らに武芸などの考え方をとり入れて完成されたものではないかと考えられる。(中略) 結果としては、あまりにも複雑にすぎて実用性を失ってしまったが、その発想については、今後も考えてみるべきところがある。

これについては、別の機会に論じたい。

(かさい・あきら 福島工業高等専門学校講師)

図

